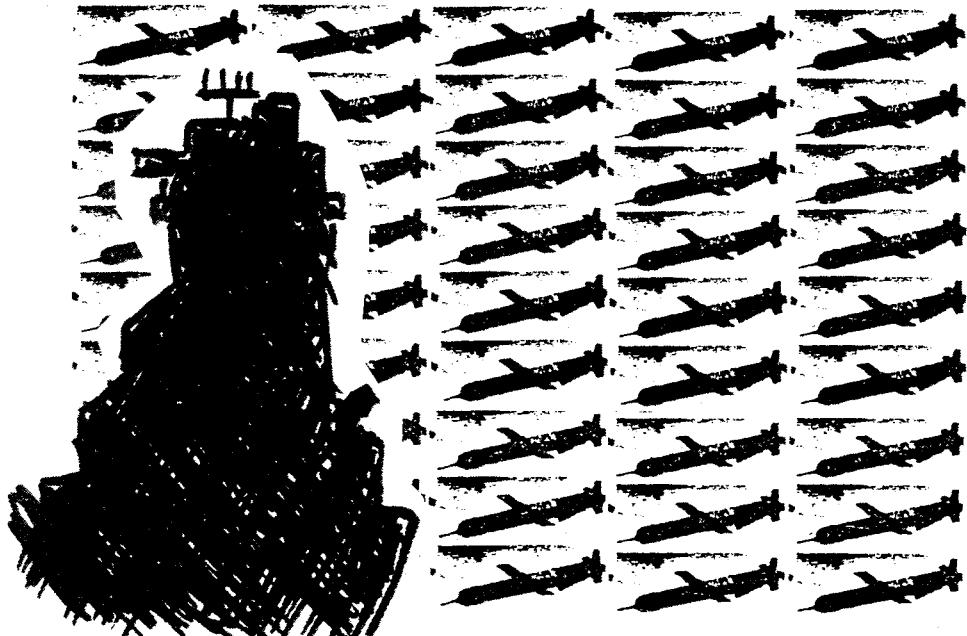


月刊トマホーク通信

No. 26
87. 12. 20
定価 100円

東京都渋谷区渋谷 2-5-9 パル青山 502 トマ喰虫社 ☎ 03(498)6095
044(63)5101



＜新年総特集＞

◆アピールと資料

— 海洋 INF・トマホークと 「ファイフ」横須賀母港化計画 —



米ソ INF「全廃」条約のかけで進む海の核軍拡。
その焦点・北西太平洋。そして私たち。

トマホークの配備を許さない！全国運動

●維持会員（月間会費）

団体 1日 2000円
個人 1日 1000円

●参加会員（月間会費）

団体 1日 1000円
個人 1日 500円

●通信会員

年間
2000円

—あなたも仲間に！

訴え

海洋INF全廃を求め、トマホーク艦ファイフの母港化に反対する

十二月二十五日 東京で記者会見発表

母港化に反対する

十二月八日、米ソ首脳会談によつて調印されたいわゆる「INF（中距離核戦力）全廃条約」は、人類が現に配備している核兵器を削減する方向に一步を踏み出した画期的なものであり、次は戦略核削減が交渉テーマになる時代に入った。

しかし、この条約では海洋配備のINFは全く手つかずに対象外に置かれているという事実に私たちは注意を喚起したい。日本周辺に配備されているINFという観点から言えば、むしろ海洋配備のINFこそが「限定」核戦争の脅威をつくり出し、この地域の軍事的緊張を高めている。その上に、明白なトマホーク搭載艦ファイフの横須賀母港が計画されるに至った。

アメリカは一九八四年六月以来、核弾頭つきの巡航ミサイル・トマホークの海洋配備を開始した。配備数は年々増加しており、一九九二年（）三年には七五八発に達する。これは、今回廃棄の対象となつたアメリカの配備済み陸上INFの一・八倍となる。ソ連もまた、海洋INFの開発に力を注いでいる。アメリカのトマホークに対抗する核巡航ミサイルSS-1N-X-21、SS-1N-X-24

を一九八八年より配備する予定である。

核トマホークの配備以来、日本へのトマホーク搭載艦の寄港は年々増加している。昨年八月には、トマホーク戦力として名高い戦艦ニュージャージーが佐世保に寄港した。トマホークのテスト艦とされた潜水艦ギターロや駆逐艦メリルも、佐世保、呉、横須賀に寄港した。トマホーク艦を従えた空母戦闘団が日本海やオホーツク海で極めて挑戦的な軍事演習を繰り返している。そしてついに、アメリカ海軍は、トマホーク垂直発射台の据え付け工事を終えたばかりの駆逐艦ファイフの母港を一九八八年九月までに横須賀に定めると発表した。世界で初めてのトマホーク艦の海外母港である。

ファイフの母港化により、日本の核状況は決定的に変化する。トマホーク艦が寄港するという段階から、日本に常駐して、居ながら発射できる状態が保たれるとともに、否定しようのない核の出撃基地となる。陸上に核ミサイル発射基地が据えられるのと変わらない意味を持つ。これ以上に非核三原則をふみにじる事態はないであろう。

日本政府は、日本近海におけるアメリカの海洋INF

の展開を積極的に支持し、日本の自衛隊がアメリカの海洋INF体制と協力する政策を取り続けてきた。またその政策を正当化する主たる理由は、ソ連の極東SS-20への対抗ということであった。この正当化の適否はさておくとしても、ソ連が極東SS-20の全廃に合意した今においても、日本政府は従来からの政策を変えようとしていない。また、日本政府は、平和・軍縮への外交に全く積極的な姿勢を示さず、無為・無策に等しかつた。このようないい日本政府の態度が、世界のすう勢に反して日本周辺の軍事的緊張を高める今日の結果を招いたと考えられる。

少なからぬ国際政治学者が、次の核戦争は海洋に端を発するであろうと警告している。戦域核戦争を封じ込めることに人類が成功しつつあるいま、日本のみが海洋INFの増強にむかって突出している状況を、私たち日本民衆は変えなければならない。一九八八年六月に国連軍縮総会SSD-IIIが開催されるが、それも念頭におきながら、私たちはこの課題の重要性を指摘したい。

ヨーロッパの民衆が、草の根の反核運動で陸上からINFを追放した先例にならって、日本の民衆が、アジア・太平洋の民衆と手を結んで海洋INFの全廃の運動をおこすことを訴える。そのための具体的な第一歩として、海洋INFの全廃を求めてトマホーク艦ファイフの母港化に反対する大きな署名運動を提唱する。さらにさまざまなレベルでの創意ある運動を連続的につくり出し、この共通のテーマの実現にむけて、草の根の民衆が相互に協力しあつて一つの世論をつくりあげてゆこう。

横須賀



「反トマホーク草の根署名運動」は母港化の事実とその意味を広く市民に知らせるため、一月十一日朝刊の「読売新聞」にチラシを折り込み配布する。チラシには大きく「六七五のヒロシマ」。米議会資料によればファイフは四十五発のトマホークを搭載する。トマホークは一発で広島に投下された原爆の十五倍の破壊力。四十五×十五＝六七五というわけだ。また、市民多数が名を連ねた「市長への手紙」も計画。「非核市民宣言運動ヨコスカ」は二六ページのパンフレット作りの突貫作業中。新年早々発行をめざす。ファイフのハリボテを引き

資料

一九八七年一月十五日

大変寒い毎日が続いている。世の中に不可解な事件が相次ぎ、何かしら寒々しい時代を享受せますが、いかがおぞむでしようか。そんな中で、私たちは先日、「ハイノーマルな話、あいを横須賀で持ち、伝えておこなう」とトマホーク艦ファイフの横須賀母港化を真剣に考えるので、について意見交換を行いました。すでにトマホークの発射台を設置したアメリカ海軍の駆逐艦ファイフを八八米合計年度（八七年十月～八八年九月）中に横須賀に配備するという計画については、同封の切り抜きのよし、新聞報道でみなさまも御存知の通りだと思います。これは世界で初めての艦船、ナイル・トマホークの米本州外への設置を意味します。また、私たちが最も注目したいのは、米ソがI.N.P.を発表したまさにその時に、海軍発射したトマホークの発射装置を、横須賀市民、神奈川県民、ひいては日本国民が、なぜ受け入れなければならないのでしょうか。駆逐艦という船が、空母を原子力潜水艦のよろに人目をひかないために、ファイフ母港化問題は、いまのところ、マスコミでもあまり問題とされず、政界ヘルでも取り組みが行われていません。しかし、私たちの見るところ、トマホーク艦の母港化は、空母ミッドウェーの母港と匹敵するほどの軍事的変化を日本周辺にもたらすものであり、徒てミッドウェー母港化反対運動に劣らない県民の関心を呼びおこすべき事件です。そこで、われわれは横須賀のよみ、県民の根運動をめぐる可能なかぎりの活動を計画してゆく必要があると考えました。つきましては、あだ様に呼び掛け人を加わって戴きたく思ひ、お説ひしますことに、左記の呼び掛け人会議に御出席いただきまことに願いします。私たちのいずれかが御連絡をとあれば、御意向をおつかがいいたします。

神奈川

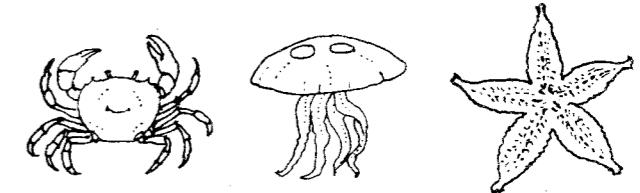
ながらの「辻説法」のプランも。

ともかく、トマホーク配備開始を控えた八四年のあの「初心」にかえって、市民の「反トマホーク」を堀り起こし、市長に「母港拒否」に踏み切らせたい、と横須賀の仲間たち。

八四年に県民世論の高まりをバックに生み出された「神奈川県非核兵器宣言」が迎える最大の試練。「横須賀をトマホーク艦ファイフの母港にさせない県民運動（仮称）」が一月十五日の「呼び掛け人会議」でスタートする（資料参照）。ここでも焦点は自治体の動向になるだろう。

88年春 海の軍備撤廃をかけ 3ヶ月のキャンペーン

一核の海を生命の海へ ピーススピリット88-



ク正義と平和協議会 ● 日本キリスト教協議会平和委員会 ● 日本はこれでいいのか市民連合 ● 日本YWCA強調点委員会 ● 婦人民主クラブ ● 平和事務所 (十一月二三日現在)

★北西太平洋反核国際シンポジウム

日時：三月六日 場所：東京

ペラウ、韓国、フィリピンなどからゲストを迎えて、各国の状況を聞き、「私たちが支援できることは何か」「私たち自身が日本でなすべきことは何か」を話し合う。

★海の軍備撤廃のための国際共同行動

日時：五月末 場所：横須賀（予定）

北大西洋ネットワーク（NAN）、海の軍備撤廃を！太平洋運動（PCDS）の呼び掛けにこたえる行動。八六年以來三度目の取り組みである。

★第三回国連軍縮総会（SSDⅢ）、非核独立太平洋ティー・ビキニティー（三・一）をはじめ様々な行動への取り組みを考慮する。

それぞれの具体的な内容や、この期間中の行動のありかたについては賛同する人々の意見によって決められるだろう。

●アジア太平洋資料センター ●トマホークの配備を許すな！全国運動 ●日本カトリック

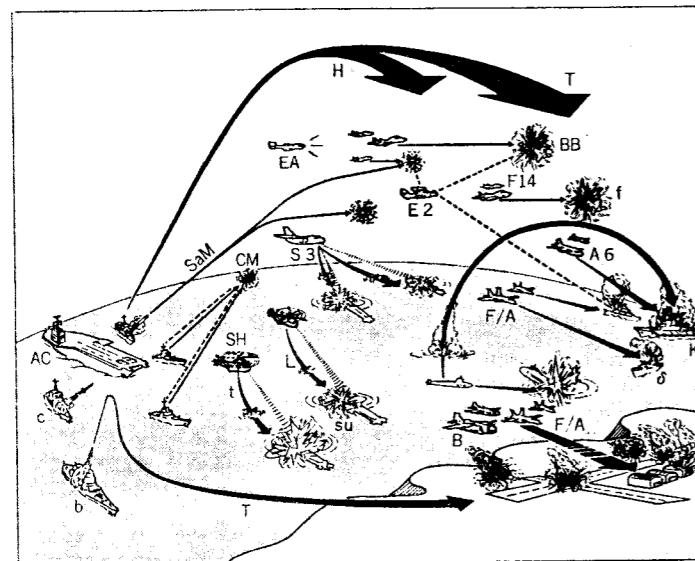
海洋における核軍拡のもつともホットな現場である北西太平洋の状況にスポットをあてて、八八年三月から五月にかけて三ヶ月間のキャンペーンが計画されている。タイトルは「核の海を生命の海へ」ピース・スピリット88。呼び掛けは次の八団体である。

まず、二つの軍事演習。ひとつは米韓合同演習「チーム・スピリット88」そしてもうひとつは「リムバック（環太平洋合同演習）88」。前者はノ・テウ新政権発足への動きの中では「反戦・反核」が中心テーマとなりつつあることが伝えられている。また後者には日本の海上自衛隊が参加する。海洋を舞台とした軍拡競争への日本の積極的参加をこれほどまではっきりと示す事件はないだろう。これは「反対行動をおこしたい」。

三月十八日には「アクションボート」が三宅島に発つ。さらに四月二十三～四日にかけて「チエルノブリ」周年の全国行動が行われる。

八八年の春は、私たちの「平和」「反核」にとって、とても重要な時となるだろう。反トマホーク全国運動は「ファイフの横須賀母港化を止める」ことを中心テーマにこれらの行動に力一杯取り組みたい。中でも「ピース・スピリット88」の三ヶ月のキャンペーンを他の行事や行動と連携しながら推進したい。読者のみなさん、ぜひとも協力と支援を！

(7)



[図2] 空母とトマホークによる対ソ攻撃

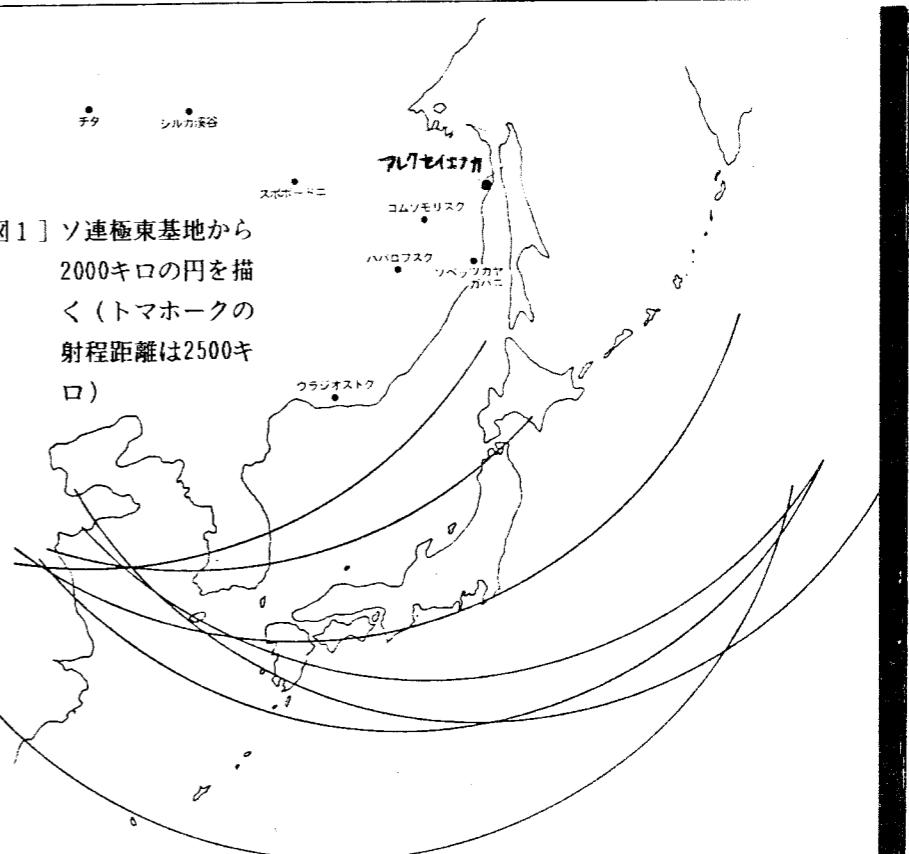
(85年米上院軍事委員会資料より)

H : ハープーン対艦ミサイル	K : キエフ
T : トマホーク海上発射巡航 ミサイル	g : 駆逐艦
BB : バックファイア爆撃機	B : A 6 艦上攻撃機/F/A18 戦闘攻撃機
F14 : F14 戦闘機	SU : 潜水艦
EA : EA-6B 電子偵察機	L : LAMPS ヘリ投下魚雷
SaM : 艦対空ミサイル	t : 魚雷
CM : 巡航ミサイル	SH : SH 3 ヘリコプター
S3 : S 3 対潜魚雷	b : 戦艦
E2 : E 2 早期警戒機	A 6 : A 6 艦上攻撃機
f : 戦闘機	F/A : F/A18 戦闘攻撃機
c : 巡洋艦	() : 空

資料 I 「ファイフ・ヨコスカ母港化」の軍事的意味

■ 海洋 INF・トマホークの発射台が横須賀に建設される。

これは誇張でも何でもない。ファイフと同型の駆逐艦で横須賀を母港にしているオルデンドーフが1985年に横須賀に滞在した日数はのべ133日。ほぼ3日に1日である。垂直発射システムは港に停泊中でも使用可能。入港中に発射体制を解除するとはまず考えられない。しかも、ソ連極東部の重要基地はかなり内陸のものまでスッポリと核トマホークの射程におさまってしまう。



[図1] ソ連極東基地から

2000キロの円を描く
(トマホークの
射程距離は2500キ
ロ)

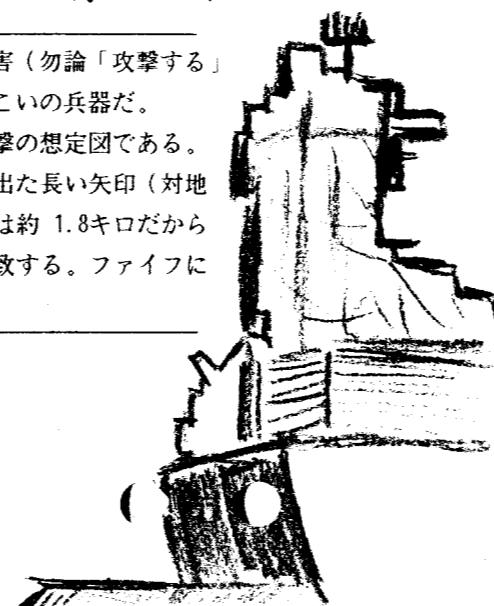
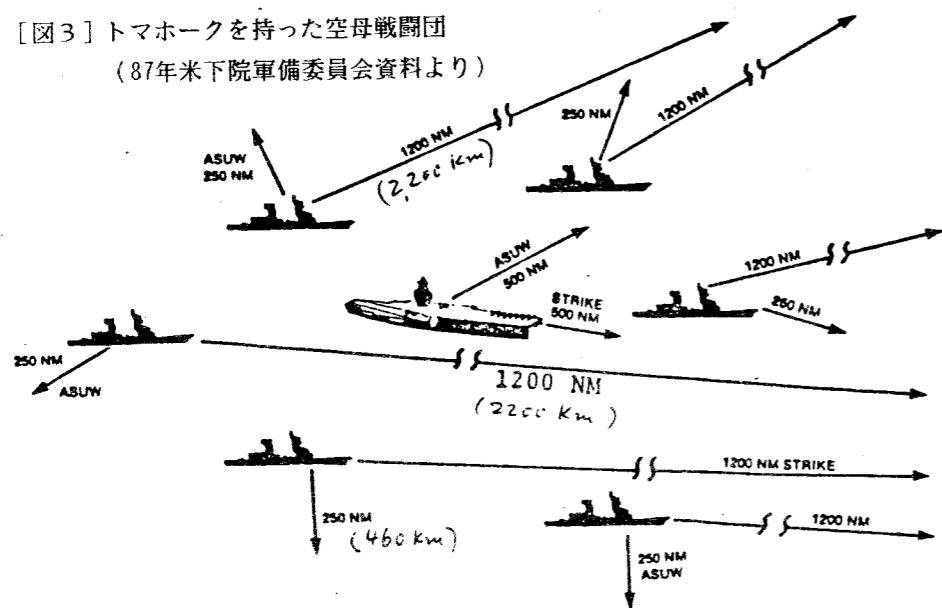
■ ミッドウェー空母機動部隊はじめてトマホーク能力 — 海洋戦略のエスカレーション

空母には出来なかった遠距離の対地核攻撃に加えて、通常弾頭のトマホークは人的損害（勿論「攻撃する」側の）無しに、敵の陣地や拠点を高い精度で叩ける。第三世界への介入・威圧にもってこいの兵器だ。

図-2は1985年に米海軍が上院軍事委員会に提出した空母とトマホークによる対ソ攻撃の想定図である。図-3は1987年に下院軍備委員会に出されたものだが、空母を取り巻く水上艦から突き出た長い矢印（対地攻撃を表す）に添えられた射程距離の数字に注目。1200NM（カイリ）とある。1カイリは約1.8キロだからこれは2200キロに相当する。核トマホークの射程距離（最大2500キロといわれる）と一致する。ファイフに搭載するトマホークが核付きであることがこんな所からも確められるのだ。

[図3] トマホークを持った空母戦闘団

(87年米下院軍備委員会資料より)



■ 搭載するトマホークは45発

ファイフの垂直発射システム（VLS）は61の発射台から構成される。1984年の米議会資料によれば、この内45がトマホーク。「世界の艦船」（87年12月号）には37と書かれているが根拠不明。いずれにしても86年に日本に寄港したニュージャージーの32発を上回る数である。残りの発射台はアスロックやハープーンにあてられる。





である。

しかし、現実には、現在の交渉は海洋配備のINFを考慮から除外している。米国は一九八四年に海洋発射型核巡航ミサイル・トマホークの配備を開始し、その配備数は最終的には七八基に達する。この数は今行われよ

全廃条約が十二月に調印されようとしている。そこでの合意はヨーロッパ、アジアにおける長射程、短射程INFを対象としているため、「グローバル・ダブル・ゼロ」と呼ばれている。我々はこの歴史的な核兵器の削減を歓迎する。それは世界中の強力な平和運動の成果である。

決議五 INF撤廃に向けて「グローバル・トリプル・ゼロ」を要求する

米国とソ連の中距離核戦力(INF)全廃条約が十二月に調印されようとしている。

そこでの合意はヨーロッパ、アジアにおける長射程、短射程INFを対象としているため、「グローバル・ダブル・ゼロ」と呼ばれている。

うとしている合意で廃棄されるミサイル数を上回る。一方、ソ連はトマホークに対抗してSSINX-21、SSINX-24を配備しようとしている。

これら海洋発射型核巡航ミサイルは、現在の海軍力の増大の最も危険な側面の一つであり、太平洋民衆の安全と主権を脅かすものである。

決議六 「海の軍備撤廃を！太平洋運動（PCDS）に賛同し「一九八八年海の軍備撤廃のための行動週間」を支持する

世界規模の支配権力と太平洋地域の支配権

力の両方による海の軍拡がいま太平洋に進行している。その軍備増強は必然的に破滅的な新兵器、とりわけ長射程の海洋発射巡航ミサイルの配備を引き起こした。

海洋の軍備競争は介入戦争と核戦争の両方の危険を増大させ、太平洋民衆の尊厳のみならず生存そのものをおびやかし、海軍力の絶えざる増強は非核独立太平洋憲章の精神も意図も、真向から踏みにじっている。

そんな中で、「海の軍備撤廃を！太平洋運動」

ある。海軍の高官は、公式に、前記の条約によつて禁止される陸上配備INFを海洋配備核兵器によつて補うことが可能であると述べている。その帰結は海洋における軍拡競争の強化にほかならない。

したがつて、一九八七年非核独立太平洋会議は、INF全廃に向けて、短射程、長射程INFのみならず、海洋発射型巡航ミサイルをも含めた「グローバル・トリプル・ゼロ」が合意されるよう要求

し、この会議の参加者がこの決議を各國政府および各國の平和運動に対し送り届け、行動を促すことを決議する。

◆ ◆ ◆

一シヨンであり、(b)トマホーク能力艦の太平洋における公然たる作戦行動、寄港の増加と(c)太平洋、とりわけ北西太平洋における軍事介入と核戦争の脅威の増大、を意味している。

したがつて、一九八七年非核独立太平洋会議は、トマホーク搭載艦ファイフの横須賀母港化計画に反対し、米海軍による将来のいかなるトマホーク搭載艦の太平洋配備計画にも反対することを決議する。

決議四 トマホークを装備した米駆逐艦「ファイフ」の横須賀母港化に反対する



第五回 非核独立太平洋会議（マニラ）における決議から

資料 II

去る十一月五日から十六日にかけてマニラで開かれたこの会議でも、INF全廃への動きをにらみながら、海洋における核軍拡競争、海洋INF・トマホークの増強や、ファイフの横須賀母港化が取り上げられ、これらに反対する草の根運動を強めることが決議された。

するその他の活動にもとり組んできた。また、太平洋運動は太平洋問題資料センター運営委員会の協力をえ、たえず情報を交換してきた。

一九八五年以来、太平洋運動と北大西洋ネットワークが組織してきた「海の軍備撤廃のための抗議行動」には太平洋の多くのグループが参加してきたが、両者はいま、「一九八八年海の軍備撤廃のための行動週間」（五月二二日～三〇日）を提唱している。太平洋における焦点は、その時行われているであろう軍事演習リムパックに当てられることになるだろう。

（10）

リムパック軍事演習が一九八八年に太平洋において行われる予定であり、その中でハイイのカホラウエ島の爆撃が行われる。カホラウエ島はハワイ先住民にとって宗教や文化行事を行なう神聖にして冒すべからざる島であり、五〇〇以上の考古学的遺跡と二〇〇〇以上の考古学的特徴を有している。一九八四年以来、アメリカがカホラウエ島を爆撃する際に今なお参加している外国軍はカナダのみである。

決議十九

リムパック（環太平洋合同軍事演習）反対行動

そこで以下のことを決議する。第五回非核独立太平洋会議に参加している各国からの代表者は、自国の政府に対してカホラウエ島を爆撃しないように確約することを求める。また、カナダ政府に対してはカホラウエ島の爆撃を中止するよう圧力を加え続けること。さらに、この会議の参加者たちは、カナダ大使館や領事館に手紙を書くこと、リムパック演習中に可能なならばカナダ大使館や領事館にデモをかけること。

「トマホークの核・非核は識別できる」

ゴルバチヨフ提案

NZ専門家は否定的

米ソINF条約調印（十一月八日）のあと、その後の軍縮交渉の議題として海洋発射巡航ミサイル（SLCM、アメリカの場合はトマホーク）がとりあげられていることは、すでに日本の新聞でも紹介されている。それに関連してトマホークの核・非核の識別について、ソ連側が興味深い提案をしたことが、京都の青木雅彦さんとニュージーランドのR・ホワイト氏からの情報でわかつたので、それを紹介して、コメントする。

まず、記事の紹介。

『ワシントン発 AFP時事』ソビエトのゴルバチヨフ書記長は、十日、水上艦や潜水艦に搭載されている核兵器の存在のみならずその能力をも検出するモニター装置を開発し、うるような飛躍的な技術進歩があつたと明らかにした。

ゴルバチヨフ書記長とレーガン大統領は、ここで三日間の首脳会談でこのような海洋核兵器に制限を設ける交渉を始めることを合意した。

以上のようないいとこりを踏まえ、一九八七年非核独立太平洋会議は「海の軍備撤廃を！太平洋運動」を評価し、眞の非核独立太平洋の実現にむかう絶えざる全体闘争の一部分であると認識する。そして、「一九八八年海の軍備撤廃のための行動週間」を支持し、太平洋の団体や個人がそれに参加するよう呼びかける。

また、太平洋運動はカホラウエ島の主人としての「『カホラウエを守れ』委員会」（PKO）のリーダーシップを尊重し、リムパック演習反対運動に関してPKOからの指示に従うべきであることを決議する。

研究者のネットワークも動きはじめた――

1987.12.6

「海の軍備撤廃を！太平洋運動」研究ネット・ワーク段

パティー・ウィリス（研究コーディネーター）

「ファイフ」の横須賀母港化について

onolulu, Hawaii 96817 (080) 845-6320
Vancouver, Canada V0R1TU (604) 335-0351



isarm the Seas Research Network
in Coordinator
FIFE at Yokosuka, Japan
of the Tomakumushi News. This
is plans to deploy the Spruance
Japan by the Fall of 1988. The FIFE is
inching system for Tomahawks.
on-deployment of Tomahawks in Tokyo
1 request for any information
able to provide about the FIFE and
the information would be welcome

同封の「Tomakumushi News」の写しを御覧下さい。スプルーアンス級駆逐艦ファイフを、1988年秋までに日本に配備しようという計画を集中的に取り上げています。ファイフはトマホーク用の垂直発射システムを備えています。

東京の「トマホークの配備を許すな！全国運動」は、研究者とその他の人々に、ファイフとその日本配備計画についてのあらゆる情報を送ってほしいと求めています。最新の写真を含めて、この艦について、どのような情報でも結構です。トマホーク用の垂直発射システムを備えています。

皆さんの支援に感謝します。

このニュースは、ニュージーランドに特別な意味を持っている。もし、これが、本当なら、ニュージーランドはANZUSを壊さなくとも非核政策を貫きうる、という議論が成り立つからだ。

しかし、ニュージーランド・ヘラルドの記事（十一月十四日）によれば、ニュージーランドの運動家や専門家は否定的な見解を示している。

『しかし防衛専門家は昨日「放射能を検出することを問わず、船自身についての実際の検証や検査することなく軍艦上の核兵器の存在を証明することのできる方法を提供する科学技術の成果を利用した」とゴルバチヨフ書記長は語った。

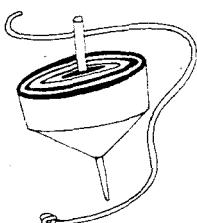
「私は、大統領や取巻きたちが同意したかどうかは判らない。しかし、私たちは提案した。もし私たちが海洋発射巡航ミサイルの制限について合意に達するならば、私たちはこの成果を分から合うことができる。私たちは、アメリカがこの方法が核弾頭の存在のみならず能力をも鑑定するのに役立つことが自分で納得がゆくように、実演して見せててもよい」と。（以下略）』

（梅林）

■新年明けましておめでとうございます。今年はどんな年になるでしょうか…。「反トマ運動」とこの「通信」への日頃の御支援に心から感謝いたします。今年もよろしくお願ひします。紙面への御意見、御批判をどうかお寄せ下さい。それが何よりの励ましです。■今年こそ「反トマ運動」の正念場です。トマホーク搭載艦が日本を「母港」にしようなどですっかり忙殺されてしまいました。

■「新年総特集」にしては、余りに「クライ」内容だ? そつそのとうり。これが88年初めの私たちの「現在位置」なのです。今年も忙しくなりそうですがおおらかに、楽しく、そしてシンケンにやつて参りたいと、まあ、こう考えております。

(た)



編集後記

会計報告

(87.11.6 ~ 12.17)

[収入]	
○前月からの繰り越し	△480,000
○会費収入	208,000
維持団体	122,000
内 維持個人	45,000
参加団体	0
訳 参加個人	13,000
通信会員	28,000
○カンパ	82,794
○反核ホットライン	23,170
(会費、パンフ売り上げ)	
 <計>	△166,096
	△155,496

[支出]	
●家賃	40,000
●電話代	4,030
●郵送費	49,010
●文具代	59,300
●印刷費	34,450
●会場費	11,500
●行動費	5,000
●雜費	860
●反核ホットライン経費	32,000
●手数料(郵便振替)	2,350
●借り入れ金返済	50,000
●次月への繰り越し	△464,596
	△388,996
	△75,649
 <計>	△166,096
	△155,496

月刊反トマホーク通信 No. 26

*発行 トマホークの配備を許すな全国運動
(東京都渋谷区渋谷二丁目十九バル
青山五〇二トマ喰い虫社)

①〇三(四九八)六〇九五
〇四四(六三)五一〇一
一〇〇円(通信会員年間一〇〇〇円)

ふたたび カンパのお願い…

88年も目一杯動きます!でもフトコロ
が余りにもさびしいのです。ごらんのよう
に全国運動の財政は相変わらず苦しいやり
くりが続いています。度重なるお願ひ、ま
ことに心苦しいのですが、どうぞよろしく。

反核ホットライン

だより

5

しかないでしょ。

最近、ホットラインで届いているハガキの数は百二十通前後です。その大部分は神奈川県下の労働組合からのものです。この数を倍増させたいのです。ぜひ、あなたのネットワークを増やして下さい。

入港情報

11・20～12・23

11・24 原子力潜水艦ボギー（スタージョン級）、午前10時、横須賀を出港。

11・24 原子力潜水艦フランシャー（パーミット級）、午前10時、佐世保を出港。

11・28 フラッシュ・ギター（スタージョン級）、正午、横須賀に入港。

11・28 ギターロ、午前10時、横須賀を出港。

12・10 ポギー、午前10時半、午後4時、ホワイトビーチに入港、沖合停泊。午後4時半、出港。

12・12 ポギー、正午、佐世保に入港。

12・17 原子力潜水艦ホークビル（スタージョン級）、正午、横須賀に入港。

12・23 ポギー、正午、佐世保に入港。

12・24 ポギー、正午、佐世保に入港。

横須賀への駆逐艦ファイフの母港化という大へんな事態を前にして、ホットラインのネットワークの底力が問われることになりました。実際のところ、ホットラインはまだこれから根をはろうとしている段階です。でもこれをチャンスとしてホットラインの力を倍増することを提案します。

●ホットラインを倍増しよう

神奈川県の港外部が、ロサンゼルス級原子力潜水艦が入港するたびに核トマホーク搭載の有無を照会するために外務省におもむいている光景を想い描いてみて下さい。外務省の強さを保障しつづけるものは、「こんなにハガキが来ている」という形に現われた民の声

北回にわたって入港している。
△十二日現在

泊泊されるのは、同艦が小樽や函館、钏路に入港していることだ。同艦の主要な任務の一つはオホーツク海に潜んで米本支を狙っているソ連の戦略核サイル原潜の監視といわれているが、こうした北海道の港への寄港は同艦が日本の北方海域で作戦行動していることをはつきり示している。

また佐世保への入港は、同艦のソ連潜水艦の探索活動の範囲が南方海域にもまたがっていることを物語る。

一回九十日間の航海でT-A CGOOS艦が収集するソ連潜水艦のデータは、艦上のアンテナから艦隊通信衛星を通じてハワイにいる米海軍の分析センターに送られている。

米海軍の北西太平洋での対ソASW（対潜作戦）における日本前線拠点化は、攻撃と防衛の両面で今年も一段と進んだといえそうだ。

（裏面下段からつづく）



原子力艦入港情報 テレホンサービス

ブッシュホンで、まず 井8301、そして連絡番号 968・1071、次に暗誦番号 1071
クロハ イレナイ

T-AGOS艦の入港状況(62年)

艦名	場所	期間
①コンテナ	佐世保	1.21~2.6
②コンテナ	佐世保	4.23~5.16
③インテナ	浜	6.3~18
④インテナ	浜	6.29~7.16
⑤インテナ	浜	7.2
⑥インテナ	浜	7.15~31
⑦インテナ	浜	8.25~9.10
⑧インテナ	浜	10.10~30
⑨インテナ	浜	11.23~27

米攻撃型原潜の横須賀への入港が著しくなった。主力のロサンゼルス級(6,000t)の横須賀への入港は昨年の三十一回から二十三回へ、佐世保への入港は昨年の七回から六回へ……と、やや子の入港に限って見ると、昨年の六隻十二回に対して、今年は六隻十三回。入港のペースは、あまり変わらない。

米攻撃型原潜の横須賀への入港は、昨年は四十一回とほぼ同数になりそうだ。一方、サーフェス型ソナー(水中マイク群列)を引つぶつてソ連潜水艦を探索するT-AGOS艦の入港も増えている。

米攻撃型原潜の横須賀への入港は、昨年は四十一回とほぼ同数になりそうだ。一方、サーフェス型ソナー(水中マイク群列)を引つぶつてソ連潜水艦を探索するT-AGOS艦の入港も増えている。

米攻撃型原潜の横須賀への入港は、昨年は四十一回とほぼ同数になりそうだ。一方、サーフェス型ソナー(水中マイク群列)を引つぶつてソ連潜水艦を探索するT-AGOS艦の入港も増えている。

米攻撃型原潜の横須賀への入港は、昨年は四十一回とほぼ同数になりそうだ。一方、サーフェス型ソナー(水中マイク群列)を引つぶつてソ連潜水艦を探索するT-AGOS艦の入港も増えている。

米攻撃型原潜の横須賀への入港は、昨年は四十一回とほぼ同数になりそうだ。一方、サーフェス型ソナー(水中マイク群列)を引つぶつてソ連潜水艦を探索するT-AGOS艦の入港も増えている。

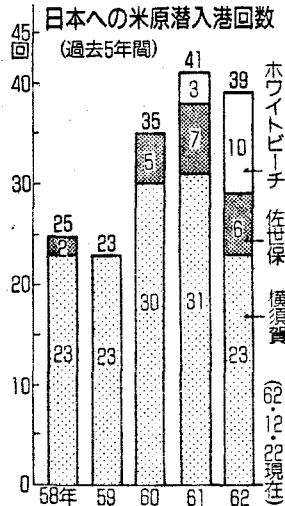
米原潜入港数は昨年並み

※ホットラインとしての87年のまとめ的分析は次号になりますが、前号に引き続いて原子力潜水艦の入港回数を12月23日現在で昨年と

比較しますと、
計 41回 (うち原潜40回)
横須賀 1回減
佐世保 1回減

ホワイトビーチ 7回増
計 7回増

※朝日新聞に石川巖記者の動向分析が出ています。大変に参考になると思いますのでコピーリンをのせました。



最新鋭のソ連潜水艦探索船T-AGOS艦(一、二八五)の入港だ。通称サーフェス艦。たくさんの水中マイクを仕掛けた長さ五キロのサーフェス型ソナーを引つぶつてソ連潜水艦の音響を数百回

ひつぞう増えているのが米海軍のT-AGOS艦(一、二八五)の入港だ。通称サーフェス艦。たくさんの水中マイクを仕掛けた長さ五キロのサーフェス型ソナーを引つぶつてソ連潜水艦の音響を数百回

ひつぞう増えているのが米海軍のT-AGOS艦(一、二八五)の入港だ。通称サーフェス艦。たくさんの水中マイクを仕掛けた長さ五キロのサーフェス型ソナーを引つぶつてソ連潜水艦の音響を数百回

北海道には対潜探索船

(表面下段につづく)